

## 【別紙 2】

### 審査の結果の要旨

氏 名 井 出 博 生

本研究はわが国の医療供給体制に関する課題の一つである医師の診療科間偏在に関連して、医師の診療科選択の変遷を明らかにすることを試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. 1974年から2004年の間に、人口10万人対医師数が113から212に増加したことを示した上で、1970年、1980年、1990年に医師免許取得者の初期の診療科からの離脱についてロジスティック回帰分析を行い、内科医と比較して心臓血管外科医や小児外科医等、男性医師と比較して女性医師の方が診療科を変えていることを示した。
2. 研究の対象期間内で産婦人科医数は大きく変動していないことを示した。また、医籍登録年を基準とするコホート間の離脱率の違いをカプランマイヤー法によって検討したところ、統計的有意差はなかった。
3. 小児科医数が増加する過程で、新人の増加と共に他科からの流入があったことを示した上で、産婦人科医に関する分析と同じ手法を用いて、小児科医の離脱が早まっていることを示した。さらに、同じ医籍登録年の産婦人科医と小児科医を比較し、医籍登録年が1982年以降では小児科医の離脱率が産婦人科医を上回ったことを明らかにした。
4. 10万人あたり外科医数は大幅に増加したが、女性外科医は男性外科医と比較して外科医を継続せず、一般外科医は整形外科医、脳神経外科医、泌尿器科医と比べて外科医を止め、脳神経外科医は他の外科医と比較して病院で外科医を継続することを示した。さらにCox比例ハザード分析を行い、女性、一般外科医、医籍登録時点の年齢が30歳以上といった属性が外科医のキャリアの移行を説明する要因であることを明らかにした。

本研究は、長期間にわたる診療科毎の医師数の増減を確認した上で、医師各人の縦断データを構成し、初期の診療科からの移行を生存分析の手法によって解析したものである。その結果、キャリアの初期に選択した診療科自体が診療科の変遷を説明する要因であることを明らかにした。これは医療政策上も重要な貢献をなす知見であり、学位の授与に値すると思われる。